

第171回 日文研フォーラム



知られざる歌麿

「百千鳥狂歌合はせ」の詩的、文法的分析

The Unknown Utamaro: A Poetic/Grammatical Analysis of
a Tournament of Comic Poems about a Multitude of Birds



ヴィクター・ヴィクトロヴィッチ・リビン

Victor Victorovich RYBIN

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 山折 哲雄

● テーマ ●

知られざる歌麿

「百千鳥狂歌合はせ」の詩的、文法的分析

The Unknown Utamaro: A Poetic/Grammatical Analysis of
a Tournament of Comic Poems about a Multitude of Birds

● 発表者 ●

ヴィクター・ヴィクトロヴィッチ・リビン
Victor Victorovich RYBIN

ロシア・サンクトペテルブルグ大学東洋学部 助教授

Assistant Professor, St. Petersburg University

国際日本文化研究センター 外国人研究員

Visiting Research Scholar, Int'l Research Center for Japanese Studies



2004年7月13日 (火)

発表者紹介

ヴィクター・ヴィクトロヴィッチ・リビン

Victor Victorovich RYBIN

ロシア・サンクトペテルブルグ大学東洋学部 助教授

Assistant Professor, St. Petersburg University

国際日本文化研究センター 外国人研究員

Visiting Research Scholar, Int'l Research Center for Japanese Studies

略歴

- 1976年 サンクトペテルブルグ大学大学院日本語音韻学専攻 Ph.D.
- 1977年 サンクトペテルブルグ大学 講師
- 1984年 サンクトペテルブルグ大学 助手
- 1989年 サンクトペテルブルグ大学 助教授
- 2002年 サンクトペテルブルグ大学 日本語科長代行
- 2002年 サンクトペテルブルグ市口日協会 会長

著書・論文等

- ・“Do Diphthongs exist in Modern Japanese?” *Proceedings & Abstracts of Papers, 6th International Conference of the Languages of Far East, South-East Asia and West Africa.*, St. Petersburg, 2001
- ・“Some Aspects of Japanese & Russian Phonology (Comparative Analysis),” Book of Abstracts, *International Congress of Asian & North African Studies XXXVI.*, Montreal, Canada, 2000
- ・*Vdarenil i Ton v Yazyke i Rechevoi Deyatel'nosti* (with co-authors, in Russian), Leningrad: Leningrad University Press, 1990 (*Accent and Tone in Language and Speech*)
- ・「ロシア人から見た日本語」『異文化との出会い』勁草書房 1995
- ・“Is ‘Mora’ a Relic in Japanese?,” *Language, Culture, Society-Problems of Development*, Leningrad: Leningrad University Press, 1986

第一部 人間歌麿について

〈はじめに〉 今日、発表のテーマは喜多川歌麿を取り上げます。私の興味を引いたのは、世界的に有名なロシア国立エルミタージュ美術館の図書館にあった図書の一冊で、*Utamaro. A Chorus of Birds* (一) という本です。率直にいうと、初めてこの絵本を見た時、驚きで自分の目が信じられないくらいでした。なんとも素晴らしい鳥たちでした！その絵本には和歌の韻律に合わせた狂歌も揃っています。この本を旧ソ連と今のロシアで手にした者は、おそらく一人か二人しかいないでしょう。

ですから、それまでの私にとっては「知られざる歌麿」の一面なのでした。私だけではありません。日本学と日本美術に関わりのある人達の間でも（一般のロシア人はもちろんのこと）ロシアでは、ほとんど知られていない歌麿の創作の分野です。私は新種を発見したかのような印象を受けました。ロシアだけでなく日本でもこのような作品はあまり知られていません。「歌麿といえば美人画の名手として知られている。しかし、歌麿がこうした女性描写とは全く無縁の、虫や草花、鳥などを描いた狂歌絵本の挿絵に、驚くべき緻密で完成度の高い世界を構築していたことは案外知られていない」と安村敏信氏は述べています（2：八頁）。「（ ）内の数字は、巻末の参考文献番号と参照頁、以下同じ」

〈歌麿の生誕の謎〉 小林忠氏の『歌麿の世界』(3〔英訳〕…六九頁)には、喜多川歌麿は an artist without a biography (伝記のない絵師) と指摘されています。人間歌麿については不明な部分が多いのです。

澁井清氏によると「喜多川を生んだ(一七五四年生) そのこぶくろ、つまり母、そして男親についても、今のところ確証がない」(4:二三七頁)。

ある説によれば、歌麿は茶屋の息子とされていますが、Sh. AsanoとT. Clark両氏はつぎのように書いています。「歌麿は吉原の茶屋の息子であったとする説は現在のところ実証されていないが、彼の出版元である蔦屋重三郎(一七五〇〜九七)がそのような出自であることは確かである、という」と。Asano とClarkは向井信夫氏の資料を利用して、右の結論を出しました(5:二三二頁)。

歌麿の出生地は何処であるかということについても、「古くから武州川越説、京都説、大坂説、江戸以外の他郷説などがあり、いずれも定説となるほどの決定的なものはないといえます」(6)。

この問題と関連して、林美一氏の『艶本で読む歌麿』(一九九二)でも様々な仮説があります。少し長くなりますが引用をさせていただきますと「江戸説あり川越説あり、大坂説あり京都説ありで一定しない。以下に述べる栃木滞在説は京都出生説に関する一

説であつて、栃木出身の浮世絵研究家、故吉田暎二氏が深い関心を示され、栃木市での調査の結果を一九四一年に発表されたのが最初でありました。「戦後は昭和三十五年十月、平凡社刊の『歌麿の美人画』に再説されているが、それによると、歌麿は京都に生まれ、幼時母親とともに、つてを求めて栃木の釜屋（善野家）を訪ね、更にその紹介で、江戸の狩野派の絵師・鳥山石燕（せきえん）に師事し、浮世絵師として独立する第一歩を踏みだしたが、名をなした後も、しばしば釜屋を訪ね、大作『雪月花』三幅対を執筆した、というものである」ということです（7・九〇頁）。

歌麿の生まれた場所については次の説があります。「歌麿がいつどこで生まれたかについての資料は、全くないといつていい。生年は宝暦三年とされるが、それも没年から逆算である。ところが実は、何歳で没したのか、信頼できる資料がないのである……」（同書…一〇九頁）。

私はもちろん、これらの見解になにか判断を下したり、他の研究者の立場や見解に対して批判などする権利もなく、個人的な意見を主張することはできません。しかし京都が好きで、「住めば京（みやこ）」をモットーとしていきますから、歌麿の出生地が京都であつて欲しいと思つていきます。

〈幼年時代〉 歌麿の本姓は北川、幼名は市太郎、のち勇助、勇記です。（同書…一〇九

頁)。歌麿がどこで生まれたにしても、幼い頃から江戸住まいであつたらう、といふのが多くの研究者の一致している考えです。近藤市太郎氏（一九一〇～六一）は、歌麿が生まれたところがどこ（ひよつとしたらどこかの地方の村にでも）であろうと、若い頃に江戸に来たとの推測をしました（8）。また、「歌麿は比較的早くから狩野派の絵師・鳥山石燕に弟子入りしていた」（7・一一〇頁）。

歌麿の年齢に係わるまた別の新しい資料が鈴木俊幸氏によって発見されました。それは、「明和七年（一七七〇）の東燕志の歳旦帖『ちよのはる』で、なかに幼い筆致で三個の茄子を描き『少年 石要画』という署名がある。少年、つまり元服（十六歳）前だから十三～四歳だろうか。従来之宝暦三年生まれ説だと明和七年は十八歳となり、計算があわない。これまでより四～五歳若返ることになる。——歌麿の場合、デビューにしても、結婚したと思われる年齢にしても、他の浮世絵師に較べて遅い。だから新資料にもとづいて四、五年ほど年齢を若返らせたほうが妥当な年齢に近づくと、小林美一氏はいう」（同書・一一一頁）。

〈弟子の身分と期間〉 歌麿の研究者の多くは彼が鳥山石燕の教え子であつたことを認めます。師弟がどうして互いに知り合つたかは、はっきりしていません。のみならず歌麿は、小さい頃から石燕の弟子になつたことを滅多に否定していません。彼らの交際は

石燕が没した年（一七八八）まで続いていたのです。

△デビュー⇩ 歌麿はその初期の頃には、芝居関係の仕事をしていたそうです（6）。歌麿の処女作と考えられているのは、安永四年（一七七五）十一月、江戸中村座上演の浄瑠璃正本「四十八手恋所訊」の表紙絵です。その後も芝居と関係がある幾つかの絵を書いていきます。役者絵も描き、彼らの似顔絵を発表しましたし、狂言と歌舞伎に関係がある作画も多くなりました。

歌麿が狂歌本『画本虫ゑらみ』の挿絵を描いて発表しているのは天明八年（一七八八）です。この作品を観るとき、よく知られている歌麿の美人画、大首画や枕絵の傑作とは全く違うジャンルの作画だと、息を呑んでしまうほどびっくりせざるを得ません。歌麿の虫や草花、鳥たちは、実に緻密で完成度の高い芸術作品であるにもかかわらず、あまり知られていません。このような歌麿を知らない人は日本にも少なくないと私は改めて強調します。「この狂歌絵本とは短歌形式の戯（ざ）れ歌というべき狂歌を、あるテーマで詠み合い、そのテーマに関連した絵と組み合わせる版本としたものだ」（2..八頁）。このような作業に熱中した歌麿は絵師にとつて不可欠な摺りの技術（雲母摺⇩）からずり、空摺⇩からずり、キメ込み等）を駆使した結果、非常にリアルな写実表現を達成できました。その作画に見られる草花や虫たちの細密描写は臨場感に溢れていると言えるでし

よう。

そのころ発表された『潮干のつと』の貝の描写は、『百千鳥』の羽毛表現の写実性とともに、歌麿の独特な創作力や彼の画家としての能力の広さが大きな特徴となつて、見事に反映されています。「この歌麿が自然界に目を向けて達成した写実の世界は、そのまま人間描写に活かされる。興味深いのは、写実の極みといわれる『絵本虫撰』を発表した天明八年に、同じく枕絵の最高傑作と目される『歌まくら』を刊行していることである。以後歌麿は女の「真」を描き続けたのであった」との安村敏信氏の感想です（同書、同頁）。

まだ絵師の卵であつた歌麿がどういふふうになつて版元の蔦屋重三郎と会つて、その擁護を受けるようになったのは明らかにされていませんが、二人が知り合いになつたことは、疑いもなく若い絵描きの運命の転換点になりました。

一七八二年秋。上野の忍岡にあつた豪華な店で宴会が開かれました。今の言葉で言えば、その宴会のスポンサーは蔦屋重三郎だつたと思われています。宴会の趣旨は、これまでいくつか違う号を名乗つていた歌麿が、今後使う画号を歌麿とすることを公に発表するということです。そのために歌麿は招待状を用意して、その中に招待客の名前も書き込みました。客は、当時の江戸のボヘミアンである有名な狂歌歌人、浮世絵師たちで

した。彼らに紹介されて、その仲間入りした歌麿は画作に没頭しました。その頃、作者清水燕十（ペンネームは怠けの馬鹿人）と共に、黄表紙本をはじめとする多くの作品を生み出しました。

〈謎めいた結婚〉 歌麿の私生活は謎に包まれています。小林忠氏によると歌麿は奥田屋平兵衛の娘と結婚しました（3・八〇頁）。それは澁井清氏の憶測に由来した判断であります。後者の推測は平兵衛の息子幸蔵の死に因んで、蔦屋が出版した狂歌集『痛み諸白』の中にある歌麿本人の申し立てに基づいているそうです。恐らく、蔦屋は自ら友人になった歌麿のためにその結婚の手はずを整えて、取り決めた見込みがあります。蔦屋のそのような手配りは歌麿の将来の成功を確保させる狙いがあったのではないかと考えさせられます。

歌麿の結婚については、様々な説があります。その一つ目は、歌麿艶本の中に登場する女性の一人。「歌麿の『會本色能知功佐』（えほんいろのちぐさ）には、「勇助・おりよ」なる男女コンビが登場する。勇助とは歌麿の本名だが、この「おりよ」が歌麿の妻の本名ではないかというのである。（中略）澁井清氏はこの女性が歌麿の妻であり、門人「千代女」でもあったとみる。専光寺の過去帳にあった「理清信女」と同一人物で、勇助＝歌麿は寛政二年に愛妻に先立たれたとの見方も成立する。澁井氏は「おりを」が

奥田屋平兵衛の娘であるとする」(7…一四頁)。

その二つ目は、澁井氏の説に対して林美一氏は「“おりよ”は歌麿が築地の旗本邸で見初めた女性だとの説を採り、さらにおりよの死後、歌麿が再婚をしたのでは、と考える」(同書、同頁)。

その三つ目は、歌麿が埋葬されている専光寺と結び付いています。そのお寺の過去帳には北川家に関する記入があります。「北川歌麻呂妻」は古くから言われていたような歌麿の弟子・二代歌麿の妻ではなく(もしそうなら、二代歌麿自身の墓も専光寺にあるはずだ)、歌麿が再婚した女性であり、また、「幻覚童子」はその後妻が歌麿の名跡をつがせるために迎えた養子だというのである」(同書、同頁)。

以上のような歌麿をめぐる話題は、結婚の説だけではありません。たとえば、菊池貞夫氏は、次のように述べています。

「彼「歌麿」の家族構成であるが、彼の身内となると、寛政二年(一七九〇)八月二十六日没した「理清信女」という仏の存在が確認されるぐらいです。そしてその仏も専光寺の過去帳によれば、葬るべき菩提寺を持たなかった処から神田白銀町の笹屋五兵衛という檀家の縁者として葬ったということがわかります。この菩提寺を持って

なかつたということが、前の歌麿の出生地に関連して諸説を産んでいるといえます。またこの「理清信女」という女性の伝は、彼の母とする説。澁井清氏は歌麿の女房お理おであると言説し、天明四年（一七八四）にはすでにこの奥田屋平兵衛の娘と結婚しているとされている。小林忠氏もこの説に同調しているが、林美一氏、鈴木重三氏などは、奥田家の家族構成を考証し、また他の資料を提示して否定的な見解をとっている。こうした最近の論争だけでなく、歌麿の妻帯については、曲亭馬琴（一七六七—一八四八）が、天保六年（一八三五）刊の『後の為の記』に、「歌麿は妻もなく、子もなし」と記しているかと思うと、『新增補浮世絵類考』（中略）の二代歌麿の条に「故歌麿が妻に入夫せし人なり」という記述がある。先の伝が歌麿の先妻であったのか、歌麿は後妻をもらったのか、また馬琴のいうように晩年そうした者がいなかったのか、色々に推測説がたてられるわけです」（6）。

とにかく、歌麿はいつ結婚したのか、結婚相手は誰だったのか、それとも、独身であったのか、彼のそばにいた（もし居たとするならば）女性は、一体誰だったのか？—母か、妻か、娘か…

人間歌麿については、以上のことから想像できるように、まだまだ不明の部分が多い

というのが実状です。絵師として割と早く穎脱し、天稟の才に溢れていた歌麿は、私生活では不幸だったと言えるでしょう。

〔歌麿の画業〕 歌麿の自然を賛美する狂歌絵本、独自のユニークな女絵、春画、歌枕、大首絵等は江戸文化の爛熟期に胚胎しました。概して言えば、彼の名前から切っても切れない、(福田和彦氏の表現によれば)生まれ出ずるべくして生まれたのが浮世絵です。

初期歌麿の女絵は先輩の絵師の美人画様式の亜流ではないかといわれています。歌麿は絵本であろうと、艶本であろうと、枕絵であろうとも、生まれつきの才能の持ち主であつたおかげで自らの流派を形成して、独特な画作のスタイルとジャンル(美人大首絵を例としてあげてもいいと思います)の草分けになつたと言えるでしょう。歌麿の美人画も他の浮世絵師と同様に吉原の花魁、市井の婦女子の風俗画、水茶屋などの評判美人を百花繚乱として描いています(9…五頁)。

歌麿が大首絵を描き始めたのは役者絵の描き様からヒントを受けたからだと思われるます。にもかかわらず、耳目を集めた彼のこうした作品(とくに、彼が制作した美人画の大首絵)の特徴については、次のような評価が与えられています。「切断形式をもつた大首絵は面輪を拡大描写した構図上の様式ではなく、内面的な心理的な美を形象化した美人画様式の新しい展開であつた」(同書…同頁)。

五十年以上前に出版された本『歌麿』（一九五二）で澁井清氏は、歌麿の大首絵をヨーロッパの巨匠の作品と較べました。「歌麿の大首絵を眺めているとつくづく美しい女の顔である。ふとレオナルドのモナ・リザの原画の大きさほど位あるであろう、そんなに大きくはあるまい。そしてルノアールの女、ルーベンスの女、ゴヤの書いた真珠のようなマハの裸体の首、等が次々と浮かび出てくる。（中略）この大首は世の芸術が捉えた女の中で、もっとも女らしい女の美しい首である。しみじみと歌麿は、偉大な女絵の名手であると今さら乍ら想を新にした」（10…一―二三頁）という澁井氏の批評には、歌麿よりも三百年程年長のイタリヤの画家レオナルド・ダ・ヴィンチ、二百年程年長のフランスの画家であったルーベンス、そしてスペインのすこし（十年）年上のゴヤなどの世界的に認められている傑作作品に匹敵していると主張できる数々の根拠がいくらかもあると思います。

歌麿の女絵だけではなく、別のジャンルの傑作は、男女の風俗画なり、流行を写す錦絵なりが華美を極めたので、江戸、日本だけでなく、「その極だった芸術性は西欧で絶賛され、『ウタマロ』の名が浮世絵の代名詞となつて世界に知れ渡るのである」と安田義章氏は書いています（8…四頁）。続けて「歌麿の大錦絵である、『歌枕』の着想の奇抜さ、構図の美しさ、人や自然の描写の見事さは他に類をみない」というのです（前述

同書。

さらに、歌麿の画作を誉め称える作家・佐野文哉氏は次のように語っています。「浮世絵を江戸時代の芸術として頂点におし上げたのが喜多川歌麿であり、東洲斎写楽であった」と(2・五頁)。

歌麿が達成した最高の仕事が美人の大首絵の創作です。日本の文化研究者、美術史家、芸術評論家の多くの歌麿評価によく見られるのは立派な誉め言葉です。彼の画業の特徴と要素は、概して、次のようなものだと思います。

— 動植物の描写にある現実主義か自然主義

— 美人画の神秘的な魅力

— 大首絵の面輪の美しさと内面的な心理的な美

— 男女風俗と流行を写す錦絵に感じられる奇抜さ

— 臨場感に溢れる吉原の遊里の描写

— 風俗画に見られるいわゆる露骨な描写とグロテスクな色つぼさ

— 枕絵の男女の色模様の大げさな顛末

— 聖母マリアのような母親像の優しさ、等々

「今歌麿を賞するとき、その刻んだ画業の卓抜き、その美人画様式の綺麗なる展開と想像性は二五〇年余に渡る浮世絵版画の歴史の中でもっとも強い輝きを見せている。もしも美人画において、春画において歌麿の存在を欠くならば、浮世絵はその美の半ばを失うにちがいない」と福田和彦氏は評価します（9…七頁）。

浮世絵と、その不可欠で大切な一部となる春画（歌麿の春画だけでなく）の重要性について早川聞多氏は次の結論をだします。「浮世絵とは主に江戸時代に描かれた性愛図のことで肉筆と版画と二種類がある。（省略）浮世絵といえば、現代では主に庶民の風俗を描き庶民を客層として描かれたものという通念が広がっており、浮世絵の春画といえばなおさら通俗的な目的、端的にいえば男性専用の道具に過ぎないと見做されがちである。しかし最近の研究によると、浮世絵春画の普及はほとんど全ての階層に及び、しかも老若男女の別なく愛好されていたことがわかつている。（中略）少なくとも好色な男性専用という意味合いに限定されるものではなく、もつと広い意味合いを孕んでいたのである」（11…二七頁）。

このような浮世絵に対する高い評価はずっと前から日本国内にあったと思つていの方々は、大いに戸惑うだろうと思います。江戸時代の社会のエリートには、庶民、町民のために数多く作られたものは、芸術作品として認められていませんでした。ある意味

で浮世絵は今の言葉を利用しますとエロチックなポップアートとして見なされていたからです。版画の作品への（日本国内での）価値観が変わったのは外国からの影響のお陰だったそうです。

歌麿の版画が、「急に注目を集め高額で取引されるようになったのは一八八〇年代の終わり頃からという」（辻信夫氏、5…一〇五頁）。こうなるために決定的な役目を果たした存在がありました。エドモン・ド・ゴンクールの *OUTANARO* という本が、歌麿の画家としての全貌を詳しく紹介して、この絵師の作品の評価を高めました。

〈運命の悲劇〉　ここでは「運命のいたずら」とか「運命の皮肉」という題を考えていたのですが、「いたずら」も「皮肉」も歌麿の人生に起こった事実の本当の意義を伝えることはできませんから止めました。一体、彼はどんな困難に陥ったのでしょうか。

寛政二年（一七九〇）。この年は歌麿にとって重要な年でした。仕事は山ほどありましたが、円熟した年齢になって、遅しく、評判のよい巨匠になりつつあったその真つ只中の悲しい出来事。歌麿の妻とおもわれる女性が亡くなりました。澁井清氏によると、「歌麿は、一七八四年頃には、吉原大門口の酒舗奥田屋兵平衛の娘と思われる「おりを」と結ばれており、その「おりを」は、寛政二年八月六日に死んで、浅草（中略）にあった専光寺に葬られ、戒名を「理清信女」といった」（3…二四七頁）。

寛政九年（一七九七）。歌麿にとって掛け替えない存在、常に励ましと庇護を与えてくれ、創作の刺激人でもあった有名な版元、葛屋重三郎が四七才の若さで亡くなりました。葛屋の死は歌麿にとって白昼の稲妻のような、突然の打撃だったと思われます。

数年前の寛政三年、葛屋が出版した洒落本が幕府の咎めを受け、葛屋は財産の半分を没収の刑に処されました。「歌麿は、この葛屋の不幸を救うかのように、勝川派の役者似顔絵で用いられていた『大首絵』からヒントを得て、『美人大首絵』という新様式によって美人画を発表したのでした」（6…参照）。

文化元年（一八〇四）。歌麿は五二歳を迎えました。「この頃、歌麿は思わぬ筆禍事件に巻き込まれた。皮肉なことに、ひっかかったのは、美人画ではなく、江戸でもよく知られた『太閤記』に取材した錦絵でした。つまりこの時代、それと関係があれば、文学作品であろうと、画作であろうと、テーマとしてタブーでありました。江戸の庶民の同情を集めていた豊臣秀吉を描くことも禁止されていました。「そこへ反徳川の気運をおおるような読本『絵本太閤記』。ましてや、それを錦絵にした相手が何度も肩透かしをくわされていた歌麿ともなれば見逃すはずもない」（7…一七頁）。結局、歌麿は取り調べ中入牢三日に及び、手鎖五十日の刑を受けました。その年齢の歌麿にとっては非常に重い罰で、苦しい体験になりました。このような重すぎる刑は歌麿に心理的にも、身

体的にも悪影響を与えざるを得ませんでした。

文化三年（一八〇六）九月二〇日没。歌麿の伝記には、只一つの事実が明記されています。それは彼が没した年月日です。その遺体は専光寺に埋葬（土葬）されています。

歌麿は五四歳で没するまで、「絵筆をふるい続けた。重い病のなかでも描くことを止めず、版下絵に囲まれてこと切れていたと伝えられる」（2..四頁）。

では、引き続き、歌麿の『絵本百千鳥狂歌合わせ』についての話に移りましょう。

第二部 歌麿の『百千鳥狂歌合』の詩的・文法的分析

それでは、『百千鳥』についてのお話に入りましょう。

これは、寛政二年（一七九〇）頃に蔦屋出版書肆から開板された、狂歌合せ大本前後編からなる二冊本です。ただし本書は、正確な刊行年が不明で、寛政二年前後と推定されています（七・六〇頁）。

本書には、前編に七図、後編に八図が収められ、一図の中に二種の鳥が描かれる構図であり、まるで鳥たちが対話をしているかのような印象を持ちます。絵本『百千鳥』は、「図柄も面白く『虫撰』とは別趣のダイナミックな趣きがある。羽毛表現に空摺りを用いたり、細線による毛描にデリケートな変化をつけた色摺りを重ねるといった具合に、技法的にも絶品といつてよい工夫が凝らされている。狂歌もなかなか楽しく「中略」ウイットに富んでいる」との安村敏信氏の評価です。（前書、六〇―六一頁）。同氏は加えて、この素晴らしい仕事を、『虫撰』に次ぐ傑作品としています。

歌麿は鳥類の生態をうまく捉えています。けれども彼の捉え方は、鳥類学者のそれとは全く違います。歌麿は、心をこめて丁寧自然界を描写しています。自然を綿密に観察し、動植物たちを念入り眺めた結果、彼の卓越した写生手腕を発揮して、このような

作品を生み出すことが出来るようになったと思います。見る者に、自然への親密感と愛着心を与えてくれるようです。

辻惟雄氏によると、フランスの有名な文学者エドモン・ド・ゴンクールは、彼の著書 *OUTAMARO* (1891) の中で、歌麿の初期の動植物づくしの狂歌本に注目し、次のように述べています。「女性を理想化して描き出すこの画家が、『絵本百千鳥』『絵本虫撰』『潮干のつと』において、小鳥や虫や貝類を、写真さながらの最高の厳密さ、正確さで描き出しているのは全く信じがたいふしぎなことだ」と。(5:111頁)

前述のように、この絵本は前後編からなる二冊大本で、折り畳み式になっています。

◆前編の鳥たち―木菟と鶯、鶉と鶯、四十雀とこまどり、むら雀と鳩、かし鳥と鴟鴞、鴨と翡翠、鷹と百舌

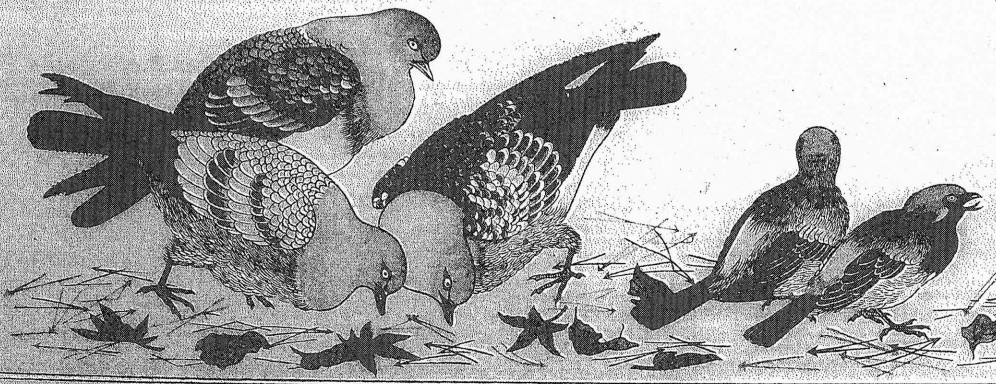
◆後編の鳥たち―山雀と鶯、鶉と雲雀、まめまわしと木つつき、山鳥と鶉、燕と雉、ゑながとめじろ、鶉と鶉、鶉と鶉、鶉と鶉

では、この中からいくつか取り上げて分析してみましょう。

喜多川歌麿画『百千鳥』(国立国会図書館蔵)

綾織主

あしはあはあのかのひらき
あしはあはあのかのひらき
あしはあはあのかのひらき



鶉 圓胡蝶

鶉の杖ついでに
あしはあはあのかのひらき
あしはあはあのかのひらき

(むら雀)

*絵本にこの首名はない。

綾織主

さだめなき 君が心の むら雀

つるに うき名の はつとたつらむ

《語彙》「さだめなき」(定め無き)は「変わりやすい、無常である、決まりがない」という意味で用いられている。「つるに」(副詞)は「結局」の意。「浮き名」は「浮いた噂」の意で使われ、動詞「立つ」と組みをなす。「はつと」は副詞で、現在の「はつと」に同じ。

《文法》「さだめなき」は「さだめなし」の連体形。「君が心」の「が」は、現在の格助詞の「の」の役を果たす。「心の」の格助詞「の」は比喩を示し、「…のような」の意。

「浮き名」の後の「の」は主体を示す。「立つらむ(ん)」の「らむ」は動詞の終止形に付く場合、現在の事実について、その原因・理由を推量する意を表し「…のだろう」に当たる。

《詩的手法》擬喩法と擬人化が使われ、雀のせっかちな性格と生態を通じて、人の定めと人生の無常が見事に表現されている。付け加えれば、有名な諺「雀百まで踊り忘れず」も連想させる。

鳩

園故蝶

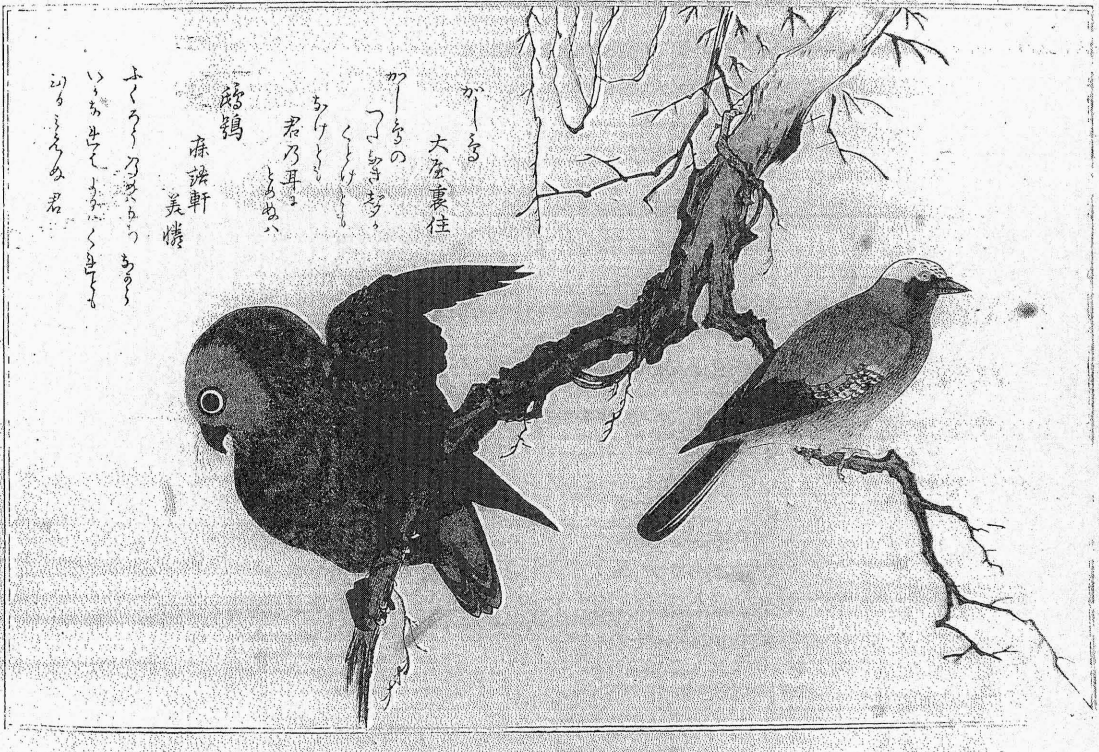
鳩の杖 つくまでいろは かはらじな

たがひに年の まめはくふとも

《語彙》「杖」は「頼りとするもの」の喩え、普通は、動詞「付く」と組む。「いろ」には、羽毛の色だけではなく、愛情の意味も含まれる。同音異義語として上手に使われている。「かはらじな」は現在の言葉の「変わる」と同じ意(文法的説明は以下を参照)。「たがひに」は現在の「互いに」と同じ。「年の豆」は節分(立春の前日)の夜に播く豆であり、数え年(年齢)あるいは、お正月の意でも利用されている。「くふ」は「食う」。

《文法》「杖」の後の格助詞を省略。「かはらじな」の「じ」は打ち消し(否定)の推量を表す助動詞で「…ないだろう」の意。「な」は感動や詠嘆の意を表す終助詞で「…なあ」「とも」は終助詞であり、仮定条件の表し方を強め「たとえ…でも」の意。

《詩的手法》鳩という鳥は平和の象徴であり、恋人同士とか夫婦のシンボルでもある。この一首も擬人化により、人間の一生に渡って続く愛情が見事に表現されている。「色」と「杖」にかかる「つくまで」の表現が二重の意味で使われ、二人の愛情の信頼性と強さを強調する。「互いに年の豆は食ふとも」の句は、実に日本らしい見事な言い回しであろう。長年に渡る男女の愛を賛美する一首である。



ふくろくろくがらり あらり
 いちあきしよにわくまじり
 河のうへにぬ 君

鴈

大空裏住
 美憐

か
 かき
 つ
 君乃耳
 もはハ

か

大空裏住

かし鳥

大屋裏住

かし鳥の つたなき声が くどけども

なけども君の 耳にとめぬは

《語彙》「つたなき」は「拙い、あるいは巧みでない」の意の形容詞。「耳にとめぬ」は現在の「耳に止めない」に同じ。

《文法》「つたなき」は「つたなし」の連用形。「くどけども」と「なけども」の「ども」は動詞の已然形に付いて、逆接の確定条件を表わし、「…のに」とか「けれども」の意。「とめぬ」は「止む」の未然形と、打消しの助動詞「ず」の連体形から成る。末尾の「は」は、終助詞で感動、詠嘆を表わし、文語の係り結びの規則に従って、動詞の連体形や終助詞に付く。

《詩的手法》前の狂歌と同じく、擬人化の技法が使われている。愛人の様子を描写しながら歌人は巧く片恋の悩みを伝えてくれる。

鴟鴞

寝語軒美隣

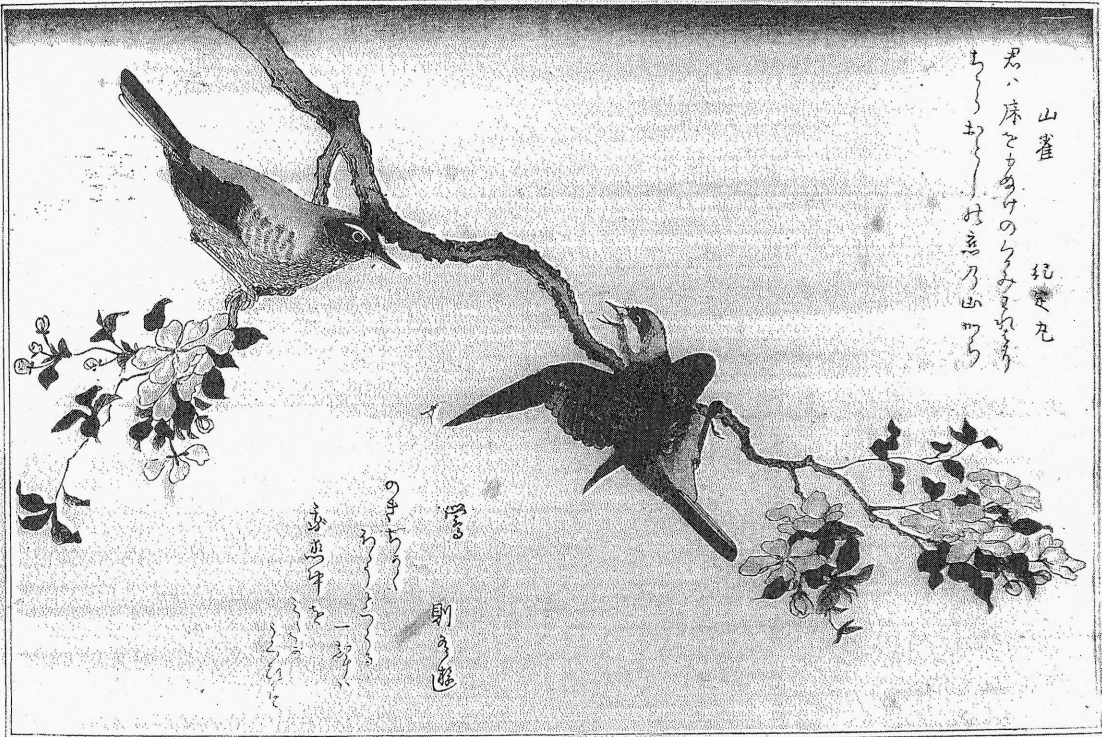
ふくろうの めはもちながら いかなれば

よるはくれども ひるみえぬ君

《語彙》「いかなれば」は、「どういうわけで」とか「どうして」。

《文法》「めは」の語形はちよつと可笑しく見えるが、対格の代わりと考えられ、強調の働きも果たしているといえる。「もちながら」の「ながら」は、動詞「もつ」の連用形に付いて、逆説的に「…でも…のに…」の作用を表わす。「ども」と「ぬ」の助詞は「く」（来）と「見ゆ」の未然形に付いている。その働きは、前の一首に現れた助詞の「ども」と同じ。

《詩的手法》この一首には比喩が用いられて、恋人の目は鼻の大きな目とは対照的に、皮肉に、風刺的に喩えられている。目の比較だけでなく、洪い擬人化の用法で、愛人の態度もうまく捉えている。



山雀
 北窓丸
 君ハ床ヲあぢケノクミヨク
 ち〜ち〜お急乃山〜り

鳥
 馴〜遊
 鳥
 鳥
 鳥

山雀

紀定丸

君は床を もぬけのくるみ わればかり
ちからおとしの 恋の山雀

《語彙》言葉の使い方は、現在の短歌の中にある単語の働きに似ている。興味を引くのは、言葉の遊戯のような使い分けである。

《文法》「君は」の「は」(係助詞)と、「床を」の「を」(対格)の用法が曖昧なのは、表面的に述語が現れていないからである。「は」は「君」を特に強く提示しているのか、主語を表わしているのか判断しにくい。「床を」の対格はどんな動詞に係っているのかも頭を悩ませるところ。この一首の文脈は動詞の脱落を考えさせられる。

《詩的手法》ここでは、比喻や隠喩 (metaphor) が用いられている。「床」と「もぬけの胡桃」の比較は見事な隠喩法となる。「もぬけ」は「蛻の殻」につながる。要するに、人の去った後の家、あるいは寢床の喩えであり、去ってしまった愛人への、片思い (片恋) を連想させる言い回しである。

鶯

則有遊

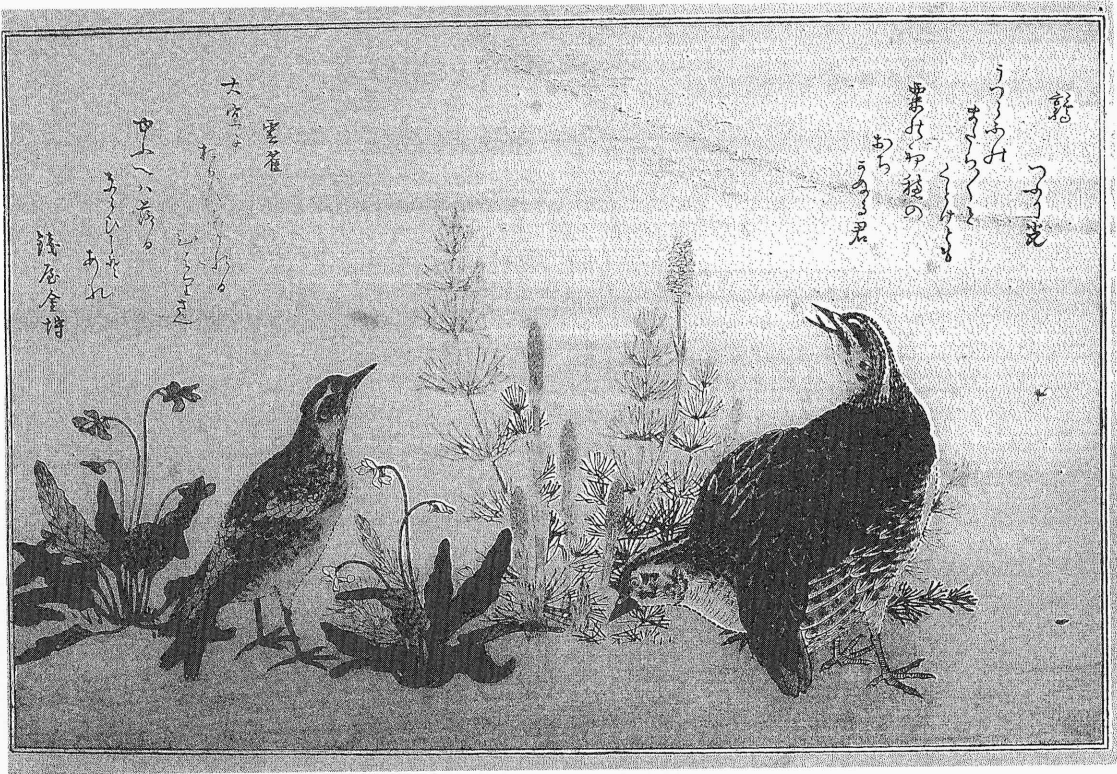
のきちかく ほほうとつぐる 一声は

我が恋中を みたかうぐいす

《語彙》「ほほう」はびっくりした感情を表わす擬音語。「つぐる」は、「知らせる。伝える」の意だが、ここでは「鳴く」に近い。「我が」は人称代名詞で、現在でも時々使われている。「私」の意。

《文法》「軒」と「近く」の後に助詞の省略がある。「つぐる」は「つぐ」の連体形。

《詩的手法》まず、この狂歌の題名である鳥の名は、その鳴き声「ウグヒス」(昔の人はこのように聞き留めたのかもしれない)に由来すると強調している。第二に、感情を表わす感動詞のような「ほほう」は、今も使われている擬音語「ホーホケキヨ」(鶯の鳴き声)に似ている。この鳥の声は日本で一番美しいと認められているようだ。ゆえに、日本の和歌をヨーロッパの言語に翻訳する場合、ヨーロッパに分布している鳥たちの中から、もっとも綺麗な声とする鳥の名を利用している。英語の翻訳では、春に美しい声で鳴くナイチンゲール (nightingale)、ロシア語の翻訳では *corobey* の使用が目立つ。両者は、鶉 (ツグミ) の近縁で小夜鳴き鳥 (さよなきどり) のような鳥類に属している。「鶯」の直訳 *bird warblers* あるは *kamimobkas* ではロマンチックな鳥はイメーシダワンでしょう。第三に、疑問の「みたか」と「うぐいす」の逆語順も技法であって、鳥との会話のような印象を与えてくれ、この場面の臨場感も生み出されていると思う。



鶉

つぶり光

うつらふの まだらまだらと

くどけども

粟の初穂の おちかぬる君

《語彙と文法》「うつらふ」の語形は、動詞「移る」の未然形に、助動詞「ふ」（動作の継続・反復の意「何度も…」。しきりに…）が付く。「の」は連体修飾語を作り、文語体では、動詞の連体形にも付く格助詞。「まだらまだら」は擬音的な言葉であるが、「まだまだ」を強める語でもあり、その意は「またるいさま、もたもた」。「くどけども」は動詞「口説く」の已然形「くどけ」と、逆接の確定を表わす接続助詞「ども」（…のに…）が付く。「だが」の意から成る。「おちかぬる」は、動詞「落ちる」の連用形「落ち」に接尾語「かぬ」の連体形「かぬる」が付く。「落ちる」ことができない」の意。「初穂の」の格助詞「の」は、比喩的に「…のような」の意を表わす。

《詩的手法》よく似た音の響きにより、鳥の名「うずら」と、動詞「うつらふ」が重なり、言葉の遊戯のようである。「まだらまだら」の擬音・擬態語的な用法により、鶉という鳥の生息が生き生きと描写されて、この場面への読者の関心と臨場感を強めている。粟の初穂の「も恋人を暗示している」とも、巧みに比喩的な比較を作り出している。このような見事な隠喩のもとより、この文脈には、擬人化の技法の上手な例の一つがある。

雲雀

銭屋金持

大空に おもひあがれる ひばりさへ

ゆうべは落つる ならひこそあれ

《語彙》「おもひあがれる」は、「思ひ上がる」だが、「気位をもつ。自負する」の意を表わすだけで、現代語のように生意気とか高慢とかの批判的な意味合いはない。「さへ」は「さえ」と同じ。「ならひ+こそ」はやや複雑である。「ならひ」は「慣らい・習い」であり、「慣れること。習慣。しきたり」か「世の常。さまじり。さだめ」の意のようでもあるが、あるいは、「古くからの謂われ」が一番びつたりするかもしれない。

《文法》「おもひあがれる」は、動作・作用が継続している意の「…ている」か、自発の意の「自然に…れる」か、あるいは、可能や尊敬の意を表わす。意味論の観点から見るとどちらでもこの文脈に合う。厳密に言えば、文語体のルール違反とも思われる。「落つる」は動詞「落つ」の連体形。「ならひ」に続く「こそ」（係助詞）はその語句を特に強く指示する。「あれ」は、動詞「有り」の已然形で結びとなる。

《詩的手法》この狂歌はウィットに溢れている。擬人化の用法により鳥の生息だけでなく、鳥の自負心までも喻えている。まさに古くからの謂われにより、どんなに高く、遠くまで（鳥の名でもある「雲」まで）飛んでいっても夜になると地面近くの寝床か巢に飛び降りるのがさまじりである。人の運命や生活様式の隠喩的な言い回しになっている。



十の鳥
 藤那玉浦
 名にこそく燕あや折ん
 亦つきけつきくも
 人け

未幾あは
 鳥のたしなほ口乃
 さらあ〜〜あま〜〜
 鳥

まめまはし

朱楽管江

忍ぶのに いらざる口の まめまわし
つゐさえづりて 名をもらすらむ

《語彙》動詞「忍ぶ」は、四段活用で（現代語では五段活用）、ここでは「秘密にする」「隠す」の意。「口」は「ことば。もの言い方」の意味合いであろう。「つゐ」は今の副詞「つい」「はからずも。おもわず。すぐに」であるか、接頭語「つい」（そのまま、ちょっと、突然）であるか不明であるが、両説ともありうる。

《文法》「いらざる」は動詞「入る」（入り用とする。必要とする）の未然形「いら」に打消の意を表す助動詞「ず」の連体形「ざる」が付く。「いらざる」の意は「役に立たない。無駄な。「さえづりて」は現代語の「囁る」とほぼ同じ、つまり「鳥がしきりに鳴き続ける」。ここではその文語体形で、今の「さえすずって」ではない。「もらすらむ」は「漏らす」「心の内に思うことを外にあらわす」か「感情を声や表情に出す」の意に、活用語の終止形に付く助動詞「らむ」が付いて、現在起こっている事柄、状況についての推量「今…しているだろう」を表わす。

《詩的手法》擬人法による寓意的な一首である。秘密（愛人の名前さえ）を守るができない人の性格を暗示する見事な比喩的文句である。

木つつき

篠野玉浦

名にたちて 恋にや朽ん 木つつきの
つきくだかるる 人の口ばし

《語彙と文法》「名にたちて」は「名前・うわさなどがひろがる」か「評判になる」の意。「たちて」は現代語の「たつて」と同じ。「にや」は疑問の意で「…ではないか」。「朽ん」は、「朽つ」（腐る、朽ちる、すたれる）の未然形に、助動詞「む（ん）」が付いて「…のような状態になる」の意。「つきくだかるる」は、動詞「砕く」に接頭語「突き」が付いて意味合いを強め、「砕く」の未然形「砕か」に助動詞「る」の連体形「るる」の語形により受け身（受動態）の構文を作る。意味的には、「砕く」は「粉々にする」か「心を痛める」かであろう。語形は受動態であるが可能の働きをも持つ。

《詩的手法》「木つつき」の名は、それ自身が擬態語であるので、狂歌の中で木霊を返すように反響して鳴り響くかのようである。耳を澄ませば言葉遊びのような音の連続「…キツツキノツキク…」（！）は早口言葉にも似る。「人の口ばし」も擬人化の技法。「くちばし」には「くちばしり（口走り）」への暗示があり、同音異義語の反復でもある。



山

山中月磨

山をたふらふてあめ

さかすか

いゝあまの

けいこ

鶉

萬徳齋

あつてあまの

あつてあまの

いよに人月の

とま

山鳥

宮中月磨

山鳥の ほろほろなみだ せきわびぬ
いく夜かがみの かげのみせねば

《語彙》「ほろほろ」は擬音・擬態語であり、「涙や葉・花びらといった小さく軽いものが、音もなく続いてこぼれ落ちる様子」を表わす(12・五三頁参照)。一方、「山鳥、雉、鳩、鶉などの鳥の鳴き声」やその羽音も反映する。「もとは羽音を写す語であったが、鳴き声の直後に羽音が連続するために鳴き声ととらえられていった」(同書、同頁)。

《文法》「せきわびぬ」(塞き侘びぬ)は「塞き侘ぶ」の未然形に、否定助動詞「ず」の連体形「ぬ」が付く複合語で、「せきとめかねない」のような意を表わす。「かけの」の格助詞「の」は比喩的表現「…のような」を作る。「みせねば」は「見す」(現代語の「見せる」)の未然形「みせ」に連語「ねば」(…しないのに)が付く。

《詩的手法》「ほろほろ涙」は、擬音・擬態語と「涙」の組み合わせにより、片思いを悲しむ人の様子が浮かび上がる見事な擬人法です。「いくよ」には同音異義語が隠され、「幾夜」か「行く夜」を連想させる。語彙を組み立てる音の巧い使い方、恋愛の情や片恋の苦しみを素晴らしく写した抒情詩の一首となっている。

この挿絵を見ると、山鳥は本当にその尾が長い(60センチぐらいといわれる)と実感できる。絵の枠内に入れない程長々しい尾であると、歌麿はわざと先を切り取るような工夫を上手にしている。

古くからの伝えでは、この鳥の雌雄は峰をへだてて寝るといふ。「あしひきの 山鳥の尾のしだり尾の 長々し夜を 独りかも寝む」(百人一首 No.3 柿本人麿)にあるように「独り寝」の例が想起される。「山鳥の尾」に「し垂り尾(長く垂れ下がっている尾)」と続けて「長々し夜」に結ぶ序詞として用いられている。

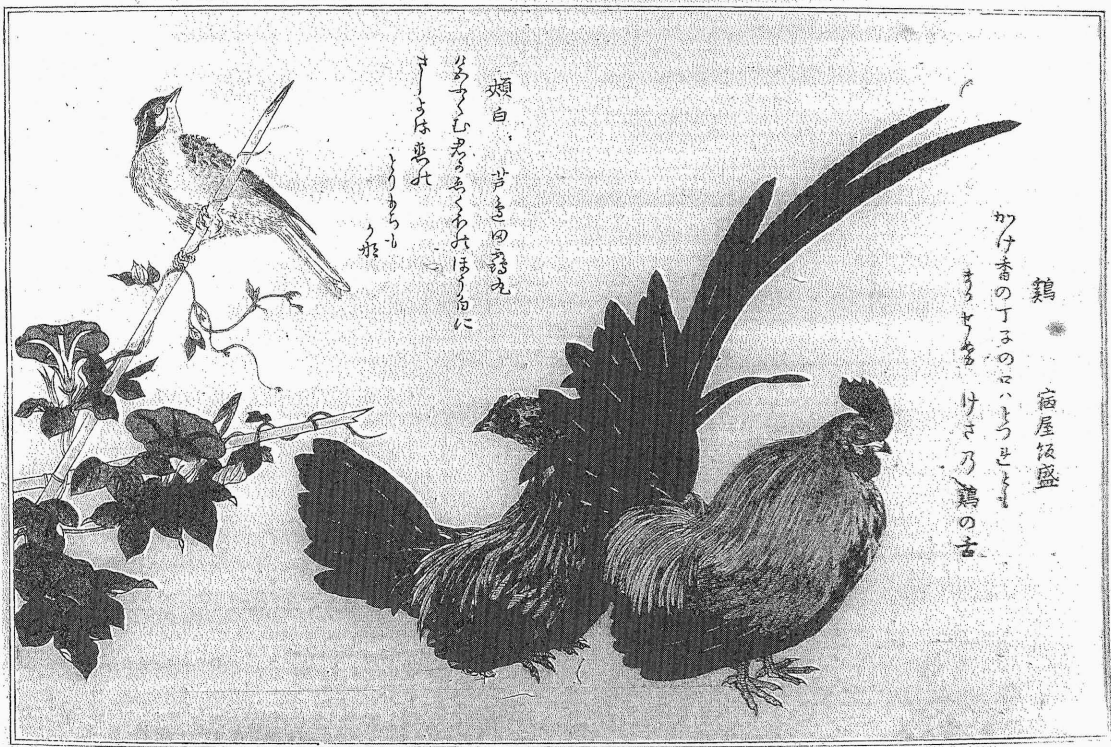
鶴鶴

萬徳齋

あつた夜に むねのおどりは なほりても
いまに人目の せきれいはうし

《語彙》「あつた」は、現代語の「会った」に同じ。「なほりても」は「直つても」か「治つても」。形容詞「うし」は「憂い(つらい。いやだ)」の意。《文法》「なほりても」は、現代の文法用法とは違い促音便はない。「人目の」の「の」は格助詞で、主語となるものを示す「が」の働き。

《詩的手法》男女の逢引きの後、胸のおどり(躍り)は治まったが、それを誰かに目撃されると、いやになってしまおうというシーンが擬人法により捉えられている。



鶏

宿屋飯盛

かけ番の丁子のこはまうせとも
 まうせとも けさ乃鶏の古

頬白、背まのり丸

なめくじあちあちわれはう白に
 こしはあは

とりあらし
 け

鶏

宿屋飯盛

かけ香の 丁子の口は とづれども
まかせぬけさの 鶏の舌

《語彙》「かけ香」は、「懸・掛香（絹袋入りの香料、室内や首に掛ける）」。「口」は「香料の丁子の入った袋の口」の意。「とづ」は現代語の「閉じる」、「まかす」は同じく「任せる」に相当する。

《文法》「とづれども」は動詞「閉づ」の已然形「とづれ」に、接助詞「ども」（…の…に…に。…けれども。…だが）の意が付く。

《詩的手法》この狂歌の主たる技法は、「かけ香の丁子」と「鶏の舌」を対照させる比喩的な比較である。鳥の舌は、匂い袋の口を閉じることのできるのに、朝方に時を伝え知らせる甲高い、調子の鋭い雄鶏の鳴き声は塞ぐことができず、はつきり聞こえると強調する。

雄鳥の鳴き声は遠くまで聞こえる。「コケコッコー！」雌鳥はわりと小さな声で「コーコー」と鳴く。「こよー！こよー！」と雌鳥が雛に知らせるかのよう。

頬白

芦辺田鶴丸

いろふくむ 君がゑくほの ほう白に
さしよる恋の とりもちもがな

《語彙》「いろ」は、「色彩」の「色」と「恋情」の二重の意味をもつ。動詞「ふくむ」は、「心中に持つ。心に留める」。「ゑくほ」は「えくほ（顰）」。「さしよる」は「そばへ寄る」か「近寄る」の意で現代語のとはほぼ同じ。

《文法》「いろ」の後、格助詞を省略。「君が」の「が」は現代語の格助詞「の」に当たる。

「もがな」は終助詞で、「…であればなあ。…があつたらなあ」の意。

《詩的手法》この狂歌は、頬白の外見とその名前をうまく交錯させている。頬白の頬の顰（白い線）は、有名な「痘痕も顰」のウィットある句も連想させる。「恋のとりもち」は、優れた比喩的表現をなしている。この一首を詠むと、恋はどれほど怪しくて、魔力のあるものかを考えさせられるようだ。

以上、数種の狂歌の分析を手短かに述べましたが、このジャンルには様々な深い意味をもつ作品が少なくありません。色々な技法の働きのお陰で、各鳥類の性質と性格、生態だけでなく、それらの巧みに擬人化した描写によって人間関係、生活問題までも考えさせられます。

通説では、狂歌とは諧謔・滑稽を詠んだ卑俗な短歌と言われていますが、私の考えでは、このジャンルの作品は本当はもっと高いレベルのもので、『絵本百千鳥狂歌合わせ』もこの観点から絶賛されるだけの価値があると思います。

狂歌の技法の一つは擬音・擬態語の利用です。それについては、次の第三部「鳥たちの鳴き声」の中で触れることにします。

第三部 鳥たちの鳴き声

昔から人間は自然との深い触れあいを保ちながら今まで生き残ることが出来ました。時々、我々はこれを忘れて、自然と対立して、身も心もほろほろに傷つけられます。それにもかかわらず、世界中の隅々にいる人々が生み出した、自然への愛着とその美しさを賛美する文学作品なり、芸術作品なりは少なくありません。自然にいる生き物に対しても同様だと私には思えます。歌麿の『百千鳥狂歌合』も例外ではないでしょう。

次に、鳥たちの鳴き声について簡単にお話することにします。鳥たちの鳴き声は我々人間の言葉ではどう写されているでしょうか。多くの場合、いわゆる擬音語 (onomatopoeia) を利用して、実際の音をまねて言葉に転換します。

一つの有り触れた例を取り上げましょう。日本語では「コケッココー」で表わされる雄鶏の鳴き声、異国の言葉ではどう表現されているのでしょうか。

英語では、cock-a-doo-dle-doo ロシア語では、kukare-kuu ポーランド語では、kukuryku ブルガリア語では、kukukuri-gu フランス語では、cocorico ドイツ語では、kikeriki オランダ語では、koekelkoe スウェーデン語では、kuckel-kull スペイン語では、quiquiriqui ギリシア語では、kikiriku イタリア語では、chicchirichi 中国語では、woo-

woo-woo が geer-geer-geer 韓国語では、kokiyō-koko モンゴル語では、geggoo-geggoo-geggoo ベトナム語では、koukkukkuu と朝が来た時を告げます。

インドのヒンディー語では、kukkukkuu で表わします。山口仲美氏によれば、東南アジアに行くと、タイでは、ek i ek ek で、インドネシアの中部ジャワでは、ku-ku-ru-yuk で、ジャワ島西部では、kong-ke-ro-ngo となります (12・九九頁)

以上の雄鶏の鳴き声を比べて分析してみましよう。似ている擬音語があれば、違ってもあります。英語の cock-a-doo-de-doo とモンゴル語の seggo-geggoo-geggoo は同じようには聞こえないでしょう。スラヴ語族のロシア語、ブルガリア語、ポーランド語はよく似ています。しかし、ゲルマン語派中の西ゲルマン諸語の一つであるオランダ語の kekelekeke はドイツ語の kikeriki よりもスカンディナヴィア語であるスウェーデン語の kyukkelekyuu にもっと近いのではないのでしょうか。ロマンス系諸言語の一つであるフランス語の cocorico は、スペイン語かイタリア語よりもロシア語の kukare-kuu に近いと言えるでしょう。

要するに、自然に鳴り響く音は、国によって異なる音韻連続で表記されています。音を発生する音波は、話者の耳に当たった時、その話者の言語の音韻体系に応じて写し出されます。だからロシア人がいくら耳を澄ませて集中しても、雄鶏の鳴き声は「クカレ

クー」としか聞き取れません。世界の言葉は多かれ少なかれ、その構造により異なりま
す。例えば、音韻の数と質、その組み合わせ、音節の構成、音量、音長などです。

日本語では昔から雄鶏の声はいつも「コケコッコ」と聞き取られていた、というのが
一般の考えのようです。しかし、山口仲美氏のデータによりますと、そうではありま
せん。日本人がそういう風に聞き始めたのは明治時代からにすぎません。さて、江戸時
代の人々は雄鶏の鳴き声をどう聞き取っていたのでしょうか。答は面白いと思います。
『とーてんこー』と聞いていたのです。夜明けを意味する『東の天は紅』と書いて『東
天紅』と読ませ、鶏の声としていたのです」（前書…二〜三頁）。

このような現象を観察すると、擬音語の深みや豊かさも理解でき、広く言えば、音を
表わす言葉がどれほど各民族の文化史との堅い絆を持っているかがわかるというもので
す。

さて、日本で一番美しく鳴いている鳥、鶯の鳴き声の例を取り上げましょう。一般に
「ホーホケキョ」という擬音語でその鳴き声を示します。私が聞くと、*Ho-ho-tyukh* としか
聞こえませんが。こう聞こえるのは、元々音痴なものですから…。けれども日本人でも時
代によって全く違う形で表記したそうです。それと関連して岡田英樹先生の「花になく
うぐひす」というエッセイ（『日文研』三〇号、二〇〇三年、四頁）から引用させてい

たきます。

『古今集』でも「ひとくひとく」と聞きなしている。つまり「人来、人来」だ。

梅の花見にこそ来つれ鶯のひとくひとくと厭いとひしもをる

(古今 俳諧 一〇二一 読人しらす)

室町時代では、「ツーキヒホシ(月日星)」と聞きなして、「ホーホケキヨ」
との聞きながが一般化したのは江戸時代になってからだそうだ：

岡田先生は、「聞きなし」という用語を使っています。一体、聞きなしとは何でしょうか。広辞苑によると、鳥のさえずりなどの節まわしを、それに似たことばで置き換えること。コノハズクの「仏法僧」、ホオジロの「一筆啓上仕り候」、ツバメの「土喰うて虫喰うて口渋い」が例として上げられています。

山口仲美氏は、「聞きなし」と関連して、次のように書いています。「実際の鳥の鳴き声をできるだけ忠実に模写しようとする『擬音語』とは、若干性質が異なっている」

(12…二〇九頁)。

鳥たちの鳴き声と関連して、もう一つのテーマに触れなければなりません。それは、鳥たちの鳴き声とその名前との相関です。三十年以上前のまだ私が学生だった頃、日本の人たちと旧ソ連で初めて面会した際、たまたま生き物の声比べが話題になりました。この時、何の根拠もなく冗談半分で「日本の鳥を、カラスというのはその鳴き声からで、ロシアの鳥もカアカア *kakkaa* ではなく、*karr-kar* と鳴くからです」と申しました。最近、山口仲美氏の意見もほぼ同様だとわかりました。

動物の名前も擬音語に由来するものが多い。カラス、ウグイス（昔はウグヒス）、ホトトギス、カリ。みな擬音語からできた鳥の名前。カラス・ウグヒス・ホトトギスは、鳴き声を写す擬音語「カラ」「ウグヒ」「ホトトギ」に、鳥であることを示す接辞「ス」が付いてできた名前。カリは、鳴き声を写す「カリカリツ」が、そのまま名前に」（前書…六九頁）。

私の昔の仮説を証明するもう一つの資料が近頃見付かりました。これは、*A Field Guide to the Birds of Japan* という図書で、それによりますと、日本の深山鳥の鳴き声は、

karararaと記録されています(13:三〇二頁)。ロシアの子供向けのテレビ番組の人形の子鳥の主人公も、その鳴き声に合わせてkarkusha(カラスちゃん)といます。日本のほろほろ鳥、はあはあ鳥、そしてジューイチの鳴き声は、juichi juichiとされています(前書:二〇四頁)。私の考えでは、フクロウ(元々はフクロフ)の名前もその鳴き声に由来すると思います。

鳥たちの名前が、その鳴き声と密接な関係にあるのは、日本語だけではありません。日本の郭公は、英語ではcuckoo、ロシア語ではkukushkaと呼び、日本の鴨のような鳥は、krya—krya—と鳴くのでkryakwa(クリヤクワ)と言います。同じく雨燕の声は、ロシアの南に住む人々とウクライナ人に、d'erg-d'ergあるいはdzyork-dzyorkと聞き取られ、その鳥をdyergach(ディエルガチ)と呼んでいます。

どんな言語においても鳥たち、動物の鳴き声を写す言葉だけでなく、自然界に響く音を反映している擬音語のおかげで、多くの場合、その単語の起源まで遡ることができるでしょう。これは主にSound SymbolismとPhonosemanticsという学問の中の重要な課題です。

「擬音語」は、実際の鳴き声とそれを表す言葉との間に音感の似寄りが感じられる。

ところが、「聞きなし」は、両者の間の音感の類似よりも、言葉の意味を最優先させる。(12:二〇九頁)

私の考えでは、「聞きなし」という技法は日本語以外の言葉にはないでしょう。その意味で、ユニークな音韻意味的な単語の使い方です。例えばロシア語には、鳥の鳴き声を表わす言葉のなかで、音と意味の融合が起こるのは、雌鳥の鳴き声の場合しか見られません。kud-kuda kud-kuda は、kuda? kuda? (くゝくゝ、くゝくゝ)と関連づけられています(子供のための歌)。

日本語の独特の聞きなしは、どうして可能になったのでしょうか。私見では、何世紀にもわたる、特定の漢字の採用に由来しています。つまり、万葉仮名、変体仮名、当て字などと無縁ではないと思います。もう一つは、無意味な音の連鎖に、意味を付けたことにあります。中国語や朝鮮語でも、同じような言葉(漢字)の使い方があるのかは、私はまだ調べていません。

〈まごめ〉

喜多川歌麿は、江戸時代において、日本の美術の伝統を継承しながら、これを発展さ

せてきました。多くのジャンルに、その腕前の鮮やかさ、絵師としての万能の天才の花を咲かせた存在です。

歌麿の生み出した美人の大首絵は、日本独特のもですが、世界の女性の肖像画の傑作に匹敵すると共に、万国の美術の普遍性の特徴を感じさせる作品が少なくありません。絵本では、巨匠の観察力の鋭さ、筆の巧みさと狂歌との完璧な釣り合いを味わうことができます。狂歌の中にも見事な技法がたくさん利用されて、水準の高い和歌もあります。これらの絵本は、ただの歌合わせの本ではなく、一種の最高の芸術品＝美術品＝工芸品です。

参考文献

- 1 *Utamaro. A Chorus of Birds with Introduction by Julia Meech-Pekarik & a Note on Kyōka & Translation by James T. Kenney. The Metropolitan Museum of Art, A Studio Book. The Viking Press, 1981.*
- 2 『江戸を読む』 4 「歌麿」安田義章監修、二見書房、一九九六年。
- 3 小林忠著『歌麿の世界』Utamaro (in English) Printed in Japan, 2003.
- 4 『別冊太陽愛蔵版「歌麿」』洪井清監修、平凡社、一九七七年。
- 5 *The Passionate Art of Kitagawa Utamaro. Catalogue Compiled by Shugo Asano & Timothy Clark. Printed in Japan, 1995.*

- 6 菊池貞夫著「歌麿の生涯と芸術」『浮世絵の粹・歌麿展』（カタログ）京都新聞社、一九七七年。
- 7 林美一、稲賀繁美等著『歌麿』新潮社、一九九一年。
- 8 Kondo Ichitaro, *Kitagawa Utamaro* (1753-1806), English Adaptation by Charles S. Terry, Charles E. Tuttle Co., Rutland, Vermont (USA); Tokyo, 1956.
- 9 福田和彦著『歌麿』（浮世絵名品撰）ベストセラーズ、一九九二年。
- 10 渋井清著『歌麿』塚原清一印刷所、東京、一九五二年。
- 11 早川聞多著『春信の春、江戸の春』文芸春秋、二〇〇二年。
- 12 山口仲美編『暮らしのたぐいば 擬音・擬態語辞典』講談社、二〇〇三年。
- 13 *A Field Guide to the Birds of Japan*, text by Wild Bird Society of Japan, ed. by Koichiro Sonobe, J.W. Robinson, Tokyo, New York & San Francisco, 1986.

発表を終えて

「千里の道も一歩から」という諺はよく知られています。今の研究テーマをもとにした今度の発表も、私が踏み出した僅かな一歩に過ぎません。まだまだ粗削りのお話でしたからお詫びいたします。

長い道程を歩み始めたばかりですから、「転ばぬ先の杖」の利用を、と思っていた矢先に私は文字通り杖をつく身となりました。階段で転び大腿骨折になってしまったのです。まさに白昼稲妻に会うような出来事でした。けれども「七転八起」主義者である私は、日本学という名の大海で、自分の研究領域をもっと広げ、深めるつもりです。

これからも、分かったこと、知ったこと、覚えたことを、ロシアにいる私の教え子と分かち合っていきたいものです。物事をあがままに見ながら、「教うるは学ぶの半ば」の格言に従って、信実にそのように生きていこうと思います。

このようにして、私の教師としての仕事と、「ロシア・日本協会」会長の活動が、ロシア人と日本人との間の相互理解を深めることに些かでも貢献できることと信じています。

ご承知の通り「会うは別れの始め」…私も皆さんと日文研で会って、間もなく日文研でお別れしますけれども、地球は回りますから、またいつかどこかでお会いしましょう。また会う日まで…



日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
⑩1	9.11.11	<p>KIM Uchang 金 禹昌 (高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授) リヴィア・モネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) カール・モスク Carl MOSK (ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授) ヤン・シヨラ Jan SYKORA (カレル大学助教授・日文研客員助教授) Kinya TSURUTA 鶴田 欣也 (ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授) パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」</p>
⑩2	9.12. 9	<p>ジョナ・サルズ Jonah SALZ (龍谷大学助教授) 「猿から尼まで—狂言役者の修業」</p>
103	10. 1.13 (1998)	<p>KANG Shin-pyo 姜 信杓 (仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授) 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」</p>
⑩4	10. 2.10 (1998)	<p>GAO Wenhan 高 文漢 (山東大学教授・日文研客員教授) 「中世禅林の異端者—休宗純とその文学」</p>
105	10. 3. 3	<p>シュテファン カイザー Stefan KAISER (筑波大学教授) 「和魂漢才、和魂洋才—語彙・表記に見る日本文化の特性」</p>
106	10. 4. 7	<p>スミエ A. ジョーンズ Sumie A. JONES (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「幽霊と妖怪の江戸文学」</p>
107	10. 5.19	<p>リヴィア・モネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) 「映画と文学の間に—金井美恵子の小説における映画的身体」</p>
⑩8	10. 6. 9	<p>Hiroshi SHIMAZAKI 島崎 博 (レスブリッジ大学教授・日文研客員教授) 「化粧の文化地理」</p>

⑩	10. 7.14	Peipei QIU 丘 培培 (バツサー大学助教授・日文研来訪研究員) 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか —詩的イメージとしての典故—」
110	10. 9. 8	ブルーノ・リッーネル Bruno RHYNER (チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日文研客員助教授) 「日本の教育がかかえる問題点」
⑪	10.10. 6	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ Ahmed M. F. MOSTAFA (カイロ大学講師・日文研客員助教授) 「『愛玩』—安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑫	10.11.10	アリソン・トキタ Alison McQUEEN-TOKITA (モナシユ大学助教授・日文研客員助教授) 「『道行き』と日本文化—芸能を中心に」
113	10.12. 8	グレン・フック Glenn HOOK (シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑬	11. 1.12 (1999)	D U Q i n 杜 勤 (華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第2学部副学部長・日文研客員助教授) 「『中』のシンボリズムについて—宇宙論からのアプローチ」
115	11. 2. 9 (1999)	シーラ・スミス Sheila SMITH (ボストン大学助教授・日文研客員助教授) 「日本の民主主義—沖縄からの挑戦」
⑭	11. 3.16	エドウィン A. クランストン Edwin A. CRANSTON (ハーバード大学教授・日文研客員教授) 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？」
⑮	11. 4.13	ウィリアム J. タイラー William J. TYLER (オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」
⑯	11. 5.11	KIM Ji Kyun 金 知見 (韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) 「内藤湖南先生の眞蹟—高麗太祖顕陵詩」

119	11. 6. 8	マリア・ヴォイヴォディッチ Marija VOJVODIC (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) 「言葉いろいろ—日本の言葉に反映された文化の特徴」
120	11. 7.13	REECE Sachiko Taki リース・幸子 滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコン サルタント・日文研客員助教授) 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
121	11. 9. 7	SONG Min 宋 敏 (韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授) 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
122	11.10.12	ジャン・ノエル・A. ロベール Jean-Noël A. ROBERT (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) 「二十一世紀の漢文—死語の将来—」
123	11.11.16	ヴラディスラフ・ニコロヴィッチ・ゴレグリアード Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク 支部極東部長・日文研客員教授) 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
124	11.12.14	X. Jie YANG 楊 曉捷 (カルガリー大学準教授・日文研客員助教授) 「鬼のいる光景—絵巻『長谷雄草紙』を読む—」
125	12. 1.11 (2000)	エミリア・ガデレワ Emilia GADELEVA (日文研中核的研究機関研究員) 「年末・年始の聖なる夜 —西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究」
126	12. 2. 8	LEE Eung Soo 李 応寿 (世宗大学校副教授・日文研客員助教授) 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3.14	アンナ・マリア・トレン・ハルト Anna Maria THRÄNHARDT (デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授) 「皇室と日本赤十字社の始まり」
128	12. 4.11	ベッカ・コルホネン Pekka KORHONEN (ユフスクラ大学教授・日文研客員助教授) 「アジアの西の境」

129	12. 5. 9	KIM Jeong Rye 金 貞禮 (国立全南大学校副教授・日文研客員助教授) 「五・七・五、日本と韓国」
130	12. 6.13	ケネ ス L. リチャード Kenneth L. RICHARD (県立長崎シーボルト大学教授・日文研客員教授) 「出島—長崎—日本—世界 憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン (1867—1944) と倉場富三郎 (1871—1945)」
131	12. 7.11	リュドミラ・ホロドヴィッチ Lyudmila HOLODOVICH (ソフィア大学助教授・日文研客員助教授) 「お盆と正教の五旬祭—比較的なアプローチ—」
132	12. 9.12	マーク・メリ Mark MELI (日文研外来研究員) 「『物のあはれ』とは何なのか」
133	12.10.10	リチャード・ルビンジャー Richard RUBINGER (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「読み書きできなかつたのは誰か—明治の日本」
134	12.11.14	SHIN Yong-tae 辛 容泰 (東国大学校日本学研究所研究員・日文研客員教授) 「日本語の『カゲ(光・蔭)』外—日本文化のルーツを探る—」
135	12.12.12	CAI Dun da 蔡 敦達 (同済大学日本学研究所助教授・日文研客員助教授) 「中国文人が観た明治日本—旅行記を読む—」
136	13. 2. 6 (2001)	バルト・ガーンズ Bart GAENS (日文研中核的研究機関研究員) 「長者の山—近世的経営の日欧比較—」
137	13. 3. 6	ポール・S. グローナー Paul S. GRONER (ヴァージニア大学教授・日文研客員教授) 「仏教の戒律とは何か？」
138	13. 4.10	L.I. Zhuo 李 卓 (南開大学教授・日文研客員教授) 「中日姓名の比較について—親族の血縁性と社会性—」
139	13. 5. 8	エッケハルト・マイ Ekkehard MAY (フランクフルト大学教授・日文研客員教授) 「西洋における俳句の新しい受容へ」

⑭⑩	13. 6.12	XU Subin 徐 蘇斌 (日文研外国人研究員) 「中国現代建築の成立基盤—留日建築家・趙冬日と人民大会堂—」
141	13. 7.10	ヘンリー D. スミス Henry D. SMITH, II (コロンビア大学教授 日文研外国人研究員) 「忠臣蔵再考—四十七士の三百年—」
⑭⑫	13. 9.18	ジョナサン M. オーガステイン Jonathan M. AUGUSTINE (日文研外来研究員) 「聖人伝、高僧伝と社会事業—古代日本、ヨーロッパの高僧を中心に—」
143	13.10. 9	アレクサンダー・ボビン Alexander VOVIN (ハワイ大学準教授・日文研客員助教授) 「日韓上代言語域：神と国と人と」
144	13.11.13	GUAN Wen Na 官 文娜 (日文研外国人研究員) 「日本社会における『近親婚』と中国の『同姓不婚』との比較」
145	13.12.11	チグサ キム ラステイーブン Chigusa KIMURA-STEVEN (ニュージーランド・カンタベリー大学準教授・日文研外国人研究員) 「大庭みな子『三匹の蟹』：ミニスカート文化の中の女と男」
⑭⑬	14. 1.15 (2002)	SHIN Chang Ho 申 昌浩 (日文研中核的研究機関研究員) 「親日仏教と韓国社会」
⑭⑭	14. 2.12 (2002)	マシミリアーノ ト マシ Massimiliano TOMASI (ウェスタン ワシントン大学準教授・日文研外国人研究員) 「近代詩における擬声語について」
148	14. 3.12	JEONG Hye Kyeong 鄭 惠卿 (世宗大学校人文科学大学副教授・日文研外国人研究員) 「日韓言語文化の比較—語る文化と語らぬ文化—」
149	14. 4. 9	マッシュュー フィリップ マッケルウェイ Matthew Philip McKELWAY (ニューヨーク大学助教授・日文研外国人研究員) 「初期洛中洛外図の人脈と武家作法—三条本を中心に—」

⑬⑩	14. 5.14	LEE Kwang Joon 李 光濬 (東西心理学研究所所長・日文研外国人研究員) 「禅心理学的生命観」
⑬⑪	14. 6.11	LU Yi 魯 義 (中国・北京外国問題研究会教授・日文研外国人研究員) 「中日関係と相互理解」
152	14. 7. 9	アレクシア ボロ Alexia BORO (イタリア カ・フォスカリ大学助手・日文研外国人研究員) 「建物と権力—明治初期の東京の建築について」
153	14. 9.10	YEE Milim 李 美林 (日文研外国人研究員) 「近世後期『美人風俗図』の絵画的特徴—日韓比較—」
154	14.10. 8	マルクス リュッターマン Markus RÜTTERMANN (日文研外国人研究員) 「伝授から伝統へ—中・近世日本における『啓蒙』の一面について」
⑬⑫	14.11. 5	KIM Moon Gil 金 文吉 (韓国・釜山外国語大学校教授・日文研外国人研究員) 「神代文字と日本キリスト教—国学運動と国字改良」
156	14.12.10	スーザン L. バーンズ Susan L. BURNS (米・シカゴ大学準教授・日文研外国人研究員) 「問題化された身体—明治時代における医学と文化」
157	15. 1.14 (2003)	デビッド L. ハウエル David L. HOWELL (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「天保七年常州那珂湊仇討ち一件 顛末」
158	15. 2.18	Zhan Xiaomei 戦 暁梅 (日文研研究機関研究員) 「隠逸山水に秘められた『近代』—富岡鉄斎を読む—」
159	15. 3.11	リチャード H. オカダ Richard H. OKADA (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「『母国語』とは誰の言葉? : 言語と国民国家」

⑩	15. 4. 8	ビル スウエル Bill SEWELL (カナダ・セントメアリー大学助教授・日文研外国人研究員) 「旧満州における戦前日本の町づくり活動」
161	15. 5.20	Park JeonYull 朴 銓烈 (韓国中央大学校教授・日文研外国人研究員) 「神々の使者に扮装する愉しみ—門付け儀礼の演劇性をめぐって—」
162	15. 6.10	RHEEM YongTack 林 容澤 (韓国・仁荷大学校副教授・日文研外国人研究員) 「詩の翻訳は可能か—金素雲訳『朝鮮詩集』の場合—」
163	15. 7. 8	Boyka Elit TSIGOVA Boyka Elit TSIGOVA (ブルガリア・ソフィア大学準教授・日文研外国人研究員) 「ブルガリア人の日本文化観—その理解と日本文芸作品の翻訳をめぐって—」
164	15. 9. 9	Inge Maria DANIELS Inge Maria DANIELS (ロイヤル・カレッジ・オブ・アート客員講師・日文研外来研究員) 「現代住宅に見られる日本人と『モノ』の関わり方」
⑩	15.10.14	WANG Cheng 王 成 (首都師範大学助教授・日文研外国人研究員) 「阿部知二が描いた“北京”」
⑩	15.11.11	CHEN Hui 陳 暉 (中国社会科学院亜太日本研究所研究員教授・日文研外国人研究員) 「明治教育家 成瀬仁蔵のアジアへの影響—家族改革をめぐって—」
167	15.12. 9 (2003)	Evgeny S. BAKSHEEV Evgeny S. BAKSHEEV (国立ロシア文化研究所研究員・日文研外国人研究員) 「人と神とが出会う場所 沖縄県宮古諸島の聖地・場所—その構造と形態を中心として—」
168	16. 4.13 (2004)	MIN Joosik 閔 周植 (韓国・嶺南大学校教授・日文研外国人研究員) 「風流の東アジア—美を生きる技法—」
⑩	15. 5.11 (2004)	Constantine Nomikos VAPORIS Constantine Nomikos VAPORIS (米国・メリーランド大学準教授・日文研外国人研究員) 「参勤交代と日本の文化」

⑩	15. 6. 8 (2004)	WANG Shukun 王 述坤 (中国・東南大学教授・日文研外国人研究員) 「近代における日本、中国の文人・作家の自殺」
⑪	15. 7.13 (2004)	ヴィクター ヴィクトロヴィッチ リビン Victor Victorovich RYBIN (ロシア・サンクトペテルブルグ大学助教授・日文研外国人研究員) 「知られざる歌麿—『百千鳥狂歌合はせ』の詩的、文法的分析」
172	15. 9.14 (2004)	スコット ノース Scott NORTH (大阪大学大学院人間科学研究科 助教授) 「セールスマンの死 : サービス残業・湾岸戦争・過労死」
173	15.10.19 (2004)	SE YIN 色 音 (中国社会科学院民族研究所研究員 教授・日文研外国人研究員) 「シャーマニズムから見た〈日本的なるもの〉」
174	15.11. 9 (2004)	LEE HanSop 李 漢燮 (韓国 高麗大学校日語日文学科 教授・日文研外国人研究員) 「明治期の外国人留学生と文明開化」

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。

<http://www.nichibun.ac.jp/dbase/forum.htm>

発行日 2004年12月15日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075) 335-2048
ホームページ：<http://www.nichibun.ac.jp>

© 2004 国際日本文化研究センター

■ 日時

2004年7月13日（火）

午後2時～4時

■ 会場

アーバネックス御池ビル東館

